

元気フェスタ PartIV

チーム家族

I. はじめに

本活動では、看護学科2年生必修科目である「家族援助論」において、地域における家族支援の実際を盛り込み、本学の地域活動への学生参画をとおして、地域住民のヘルスリテラシーの向上を支援した。学生は、非常勤を含めた看護学、教育学、心理学の教員が個別の家族支援から地域の家族支援の具体的事例を学習した後、健康教育を主とした家族支援の実際を地域に出向き実施した。

II. 目的

本活動の目的は、以下の点が挙げられる。

1. 学生のヘルスリテラシー向上につながる

青森県としての地域特性、家族支援の具体的方法、健康教育の方法を学んだ上で、地域のなかで健康の保持増進に関する家族支援の実際を企画・準備・実践してみることに、学生自身のヘルスリテラシーと地域活動意識の向上を目指す。

2. 住民(青森県)のヘルスリテラシー向上につながる

多様な形態がある家族に対して、学生による様々な教材を用いた健康教育等により、住民のヘルスリテラシー向上につながる可能性がある。

上記の目的に加え、今年度の本活動の目指す目標としては、昨年度から会場を変え、延べ約1,100名の参加者があったことから、今年度も引き続き、同じ会場で実施し、多くの来場者に対してヘルスリテラシー向上につながるプログラムを実施する。さらに、学生のヘルスリテラシー向上への寄与についても客観的に評価する。

III. 活動方法

「家族援助論」の授業のねらいは、家族に関する基本的な知識のほか、家族看護、家族支援の具体的方法について理解し、地域における家族支援の実際を通して、学生が積極的に地域のさまざまな活動に主体的に関わることができるよう、学生のヘルスリテラシー向上を目指すこと、である。

本活動は、4月に会場と実施日を検討し、昨年度の会場変更により住民の参加者が増員したこともあり、住民が多く集まる場所が確保できるように検討を早期に実施した。住民が参加しやすい時期や学生の試験期間を考慮し、今年度は実施日を2月に設定した。そして、周知のためのチラシ(写真①)を作成し、10月の学祭をはじめ、青森市の健康関連イベント、地域看護学実習での地区踏査などで配布し、また関係機関への投げ込みも行った。

11月～1月には、「家族援助論」が開始し、学生は家族に関する基本的な知識、地域社会活動につながる知識・技術のほか、家族看護、家族支援の具体的方法についての講義を受講した。また、ヘルスリテラシーに関する、地域における家族支援プログラムの企画立案を行い、健康教育の指導案や教材の作成を行った。このプログラム実施に際し、構成員となっている弘前大学、弘前学院大学の教員にも参加してもらい、教育学的な視点、社会参加的な視点も盛り込んだ。家族支援という視点と地域活動が結びつきにくい点に考慮し、

プログラムの企画前の授業内容において、その点について強化し、「地域における家族支援」について理解できるように、担当者と打ち合わせを行い、実施した。

2月2日には、学生の統括グループが中心となって学生11名で会場の下準備を行い、2月3日の当日を迎えた。



【写真①：チラシ】

IV. 活動結果

2月3日(日)に青森県観光物産館アスパムで「元気フェスタ! PartIV」を実施した。保健大学看護学生108名、弘前大学から3名、弘前学院大学から10名の学生が参加し、15の企画を実施した。15の企画ブースは、①血圧測定【写真②】、②血管年齢測定、③骨密度測定、④体組成測定、⑤ストレスチェック、⑥視力測定、⑦体力測定、⑧高齢者疑似体験【写真③】、⑨育児体験、⑩歯科口腔【写真④】、⑪ハンドマッサージ、⑫肩温罨法、⑬ストレッチ体操【写真⑤】、⑭子どもの遊び場(弘前大学の企画)、⑮げんきっさ(弘前学院大学の企画)である。



【写真②：血圧測定】



【写真③：高齢者疑似体験】



【写真④：歯科口腔】



【写真⑤：ストレッチ体操】

来場者数は、延べ1,114名、ブースの中で最も多かったのは、骨密度で104名、つい

来場者数は、延べ 1,114 名、ブースの中で最も多かったのは、骨密度で 104 名、ついで体組成測定、血圧測定、ストレスチェックで 100 名であった。少ないブースで高齢者疑似体験 24 名、血管年齢測定 27 名であった。昨年並みの来場者数であった。来場者への終了時のアンケート結果(110 名)では、年齢層は 40 代、70 代の方が多く、男性よりも女性が多い特徴があった。来場したきっかけは、偶然来た方やチラシを通して知って来た方が多かった。参加してみて、これからの生活に活かせるような情報は「たくさんあった」「まあまああった」が過半数であり、「身近で良い企画だと思った」「食べ物に気をつける」「ラジオ体操を続けたい」などの感想記載されていた。

学生には、実施の振り返りをさせて、来場者(住民)のヘルスリテラシー向上につながったか考察させ、以下の内容が挙げられた。

- 実際の結果を見て、納得している様子や現状に驚いている様子が見られ、具体的な数値として示すことで、行動や意識の変容のきっかけにつながることで実感できた。
- 骨密度や体組成などの測定ブースから、体操、体力測定、ハンドマッサージなど普段の生活の中で取り入れられるようなものまで幅広くブースが設置されていたため、関連するブースを勧めることで、つながりをもって各ブースで知識を得ていくことが可能であった。
- 幅広い年代の方が来場して驚いた。最初は測定を遠慮していたが、子どもを測定に誘い、子どもの測定終了後にその親が測定に望んでくれた。
- それぞれのグループが健康についてのパンフレットを渡していた。会場だけでなく、自宅に帰ってからも継続していけるような取組みであったと思う。(中略)また、家族で参加している方も多くいたので、1 人では続けられないことも家族全体にアプローチすることで良い結果が得られるのではないかと考える。

V. 活動の総括

今年度実施した「元気フェスタ PartⅣ」は、昨年度並みの来場者があり、大変好評であったことが伺える。チラシの効果や同時期に開催されているイベントの影響もあり、年齢層も幅広く、家族や友達同士での参加も多くみられた。また、来場した方は、この機会を通して自分の現状を把握し、そして、自分には健康に関してどのような行動が必要なのかを実感する貴重な機会となっていたと考えられる。また、学生は来場者への関わりを通して、実際に上述の体験をすることができ、実施したことへの達成感や学びも多くあった。以上のことから、本活動の目的は達成できたいと考えられる。

また、今回実施してみて、青森県民が年齢を問わず、健康について関心を多く持ち始めているのを体感できた。次年度もぜひ継続して実施し、県民のヘルスリテラシー向上に寄与できればと考える。

VI. 謝辞

ご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

Ⅶ 活動構成員等

(チーム名：チーム家族)

	氏名	所属	役割分担
活動代表者	古川 照美	看護学科・教授	活動全体にかかる調整・運営・統括
経費執行責任者	倉内 静香	看護学科・講師	活動経費管理、地域における家族支援プログラム実践の支援
構成員	増田 貴人	弘前大学教育学部・准教授	家族支援プログラムに関するアドバイス、実践の支援
構成員	生島 美和	弘前学院大学文学部・准教授	地域社会参加に関するアドバイス・調整、実践の支援
構成員	谷川 涼子	看護学科・准教授	プログラム運営管理、地域における家族支援プログラム実践の支援
構成員	青森県立保健大学学生	看護学科 2 年生・108 名	地域における家族支援プログラムの企画・準備・実践
構成員			
構成員			
構成員			
構成員			

※欄が不足する場合には、適宜行を挿入ください。

Ⅷ 活動経費（執行額）

(単位：円)

年度	活動経費	科目				
		報償費	旅費	需用費	役務費	備品購入費
平成 30 年度	300,000	0	0	82,133	0	217,860
総計	299,993	0	0	82,133	0	217,860

※活動経費執行内訳等の詳細は別紙「収支管理簿」のとおり。

